
†サイコネシスト七神†

燦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＋サイコネシスト七神＋

【Nコード】

N3394A

【作者名】

燦

【あらすじ】

自らの軀で七つの人格と共存するサイコネシスト『七神』。『七神』は七色の瞳と、七つの独自の能力を持ちあわせる。これは、『七神』の呪われた運命を遺す物語である。

[1]

自らの軀で七つの人格と共存するサイコキネシスト『七神』

『七神』は七色の瞳を持ち、人間のあらゆる物を映し出す。

これは『七神』が、その呪われた運命と共に、生きた証を刻む物語である。

[2]

時代は幕末。

小さな港町の片隅で甘味処を営む千里子^{チリコ}は、二階の一番端にある部屋の戸に手を掛けた。

「朔^{サク}、起きてる？」

室内からの応答がない。

あの怠け者、こんな昼過ぎまで寝ているなんて。

千里子は、溜息をつきながら部屋の戸を開けた。

その部屋は、店の前の道に沿って窓が設置されており、障子を開ければ好きな様に外界を眺めることが出来る。

その障子は既に開かれていて、窓際で煙草をふかし、片目を眼帯で固めた青年が一人佇んでいた。

「もう、また外眺めてたの？　まだ寝てるかと思ったわ」

千里子は敷かれたままの布団をたたみながら、部屋に佇む青年に話し掛けた。

振り向いた青年は、ふわっとした温かい微笑みを浮かべ千里子の言葉に答えた。

「僕は朔じゃないよ。」

目線をふと布団から青年に移した千里子は、驚きもせずに話を続け

た。

「その喋り方は、蒼輔ソウスケさん？ おはよう、蒼輔さん。今日もまた依頼の方がいらしてるわよ。ちようど良かった、朔だと依頼の時話にならないから」

「依頼？こんなに早くから、またせっかちな人だなあ。昼間は甘味処として営業してるってのに。そのことちゃんと言ってある？」

千里子はたたみ終わった布団を押入れにしまいながら、文句を言う蒼輔を諭した。

「まあ、本業は甘味処じゃないからね。とりあえず隣の部屋へ通しておいたから。あとお願いできる？」

「まあ、千里ちゃんがそういうなら仕方ないか……」

蒼輔と呼ばれた青年は、ゆっくりと立ち上がり隣室へと向かった。

[3]

「失礼します」

蒼輔は、隣室の部屋の戸を開けた。

室内は障子からの明るい陽射しで、やわらかな空気が広がっている。

そこには窓を横目に、渋めの配色に梅の柄を施した着物を身に纏う小柄で華奢な女性が正座していた。

「貴女が……？」

蒼輔は不思議に思い、目を細める仕草をする。

今、目の前に居る女性は両目をしっかりと閉じ、音を頼りに蒼輔を伺っているように見えたからだ。

目が悪いのか……

蒼輔は直ぐにその女性が盲目であることを把握し、同じく正座の形で女性の前に腰を下ろした。

「初めまして、依頼を受けた蒼輔と申します。貴女が依頼主さんで
しょうか……？」

それまで少し不安そうな表情を浮かべていた女性は、蒼輔のやわらかい声音に安心したのかこれまたあたたかく優しい微笑みを作った。

「はい、名を美和子と申します。蒼輔様：が『七神』と呼ばれるあの……？」

「恐れ多くも。僕は『七神』の中の人格です。どの程度まで『七神』をご理解頂いているかわかりませんが、僕は他人の過去を記憶を通して断片的に覗くことが出来ます」

美和子と名乗る女性は、蒼輔の言葉を聞き逃すまいと物音一つ立てずに声の方向に集中していた。

「『七神』については風の噂で少しだけ知っている程度です。噂では、七色の瞳、七つの人格、七つの独自の力を持つ人とのことでしたが……」

「成程、では依頼をお受けする前に僕達自身の『七神』についてご説明致しましょう」

蒼輔は、自分の腕を顎に置き考えるポーズをとると、ゆっくりと『七神』についての説明を始めた。

[4]

「では、まず僕達人格についての話を致しましょう」

蒼輔は、煙草に火をつけてくわえると、ふと思い出したように美和子へと話し掛けた。

「煙草の方は大丈夫ですか？」

「あ、はい。父が昔吸っておりましたので」

美和子は先程にも見せたあの優しい微笑みを作り応答する。

「どうも。では簡単に『七神』を説明致します」

煙草の煙を肺から思いきり吐き出した蒼輔は、目線を美和子から障子が閉まった窓の方へ移した。

「『七神』とは、一人の人間の中に七人の人格が生まれつき存在している人間のことを言います。肉体を持たない人格が一人の軀の中で七人共存しているのです。言ってしまうえば多重人格者と言うことです。」

「多重人格者……？」

美和子は少し怪訝そうな顔をした。

それも当たり前だろう。この時代、多重人格者などという言葉は存在しない。

「多重人格者とは、幼少期に何らかの精神的ショックを受けて精神が幾つかの人格に分裂してしまう病気です。ただ、多重人格者と僕達とでは大きく異なる場所があります」

「異なる場所……とは？」

美和子は少し先を急かすように、蒼輔に問いかけた。

一方蒼輔は、室内に蔓延した煙草の煙を外に逃がそうと窓際へと近寄った。

「一つは、生まれつき七人の人格が共存する僕達と、精神的ショックを受けてやむなく一人の人格から幾つかの人格に分裂してしまう多重人格者という違いです」

美和子は少し困ったように難しい顔を作った。

「あの、すみません。少し難しくて……」

「ああ、これは失礼致しました。では、こう説明すればわかって頂けるでしょうか。多重人格者は元々は一人の人格しかいない人間です。ですが僕達は生まれながらに七人の人間が一つの軀に居る。これが僕達『七神』です。これでご理解頂けましたか？」

「あ、はい。なんとなく……」

蒼輔は窓際に腰を下ろし、美和子の方を向いた。

「あとは、多重人格者とは違い僕達は人格通しの記憶を共通して持っていることです。ですから、七人の中の誰が表へ出て行動を起こしていても悪さをしようとしても、中の人格達も一緒に僕とその光景を見て理解しているということですよ」

「では……？」

蒼輔は煙草の火を消すと美和子の方へ微笑み掛けた。

「美和子さんの察する通り。今僕の中に居る他の六人の人格も貴女を見えていますし、話も聞こえています」

「そうだったのですか……」

美和子は驚きの表情を浮かべる。

蒼輔はそんな反応は慣れているといった感じに、構わず話しを続けた。

「もちろん僕の中に居る六人はそれぞれ性格も性別も名前も違います。好みもちがえば、僕のように煙草を吸うもの吸わないもの様々ですよ」

「……それが、『七神』」

美和子が納得したように呟くと、蒼輔は説明を続けた。

「いいえ、これだけでは『七神』とは言えないのです。『七神』にはあと一つ、普通の人間とは違うところがあります」

そう言うと、蒼輔は固く締められていた眼帯の紐をほどき始めた。

[5]

「それが、この各人格に与えられた瞳の色と、瞳に宿るそれぞれ七つの力です。」

眼帯をとった蒼輔の方目は、綺麗なコバルトブルーをしていた。美和子は、余りの美しさと物珍しさに少しの間そのコバルトブルーに見入ってしまう。

「僕達七人に託された七色の瞳、そして各人格に見合った特殊能力。これがそろって初めて『七神』と言えます」「七つの神で『七神』……そういう意味があつたのですね」

美和子は、実際なら眩しいであろう光が隙間から射してくる窓際の方へと向けて微笑みを作った。

蒼輔はと言うと、そのコバルトブルーの瞳を細め、美和子の方を伺っている。

「そして、先程にもいいましたが、僕のこの青い瞳は、他人の記憶を通して断片的に過去を見ることが出来ます」「他人の過去を……」当然意識して相手を見なければ蒼輔であっても過去は覗けない。だが美和子は、何かに恐怖するような仕草を見せた。

「そして、その力の使い道は様々です。闇に手を染める者も居れば、僕達のように力を仕事にして生きている奴も居る。中には自分が『七神』だと気付いていない者もいます」

蒼輔は、美和子の表情など何一つ気にせず淡々とことを説明していく。

「自分が『七神』であると気がついて居ない者は、中の人格と疎通が上手く取れずに居る、あるいはまだ自分の力を見付けていない……と言うのがほとんどです」

「では貴方達は……」

美和子が必死に自分の話を聞き入れようとしているのがわかり、この時ばかりは蒼輔もゆっくりと何時もの口調でやわらかく言った。

「そして僕達は幸運にもその特殊能力を見付け、中の者と疎通している。だからこの、『真実の売人』と言う仕事ができる」

蒼輔含む七人の人格はそれぞれの特殊能力を生かし、時の闇に沈んだ謎の解明をしている。毎日のように訪れる依頼主に従い、隠された真実を見出しそれを売るのだ。

それは決して楽な道のではない。

他人の過去を覗き、或いは他人の感情、気持ちを探る。

人間のドス黒い闇に、常時触れていることになる。

「僕達は生まれながらに呪いを背負わされた化物なのかもしれない。だからこそ、人の闇を忘れてはいけないのです……聞かせて頂けますか？ 貴女の闇を……」

蒼輔は、障子を静かに閉めると美和子の前へと再び腰を下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3394a/>

†サイコキネシスト七神†

2010年10月22日10時00分発行